

生徒の皆さん、おはようございます。

令和4年、新しい年を迎えました。いよいよ、今日から3学期です。皆さん一人一人、それぞれに実現したい夢や叶えたい希望で、胸がいっぱいのことと思います。

みなさんが、冬休みの課題で書いた「書き初め」のことばで、全学年に共通して使われていた今年の言葉は「窓」。

そこには、新年を迎えて、「心の窓」を開けて、新しい風を取り入れることによって、これまでのよどんだ空気やもやもやなどをいったん取り除き、スタートしようといった意味合いが込められているような気がします。

さて、新しい年のスタートに当たって、「覚悟はいかに 初心忘るべからず」ということについて、みなさんを応援したいと思います。

昔から「事の始めは覚悟を決めることにある」といわれてきました。何かをやろうとすれば、覚悟を決める、決心することから始めるわけです。心を決めないことには、何もできないものです。

「初心忘るべからず」というのは、今から600年ほど前に活躍した「世阿弥」という能役者でもあった人の『花鏡』という能楽論書に出てくることばです。

勉強をやるにしても、運動やスポーツをやるにしても、また塾などでの習い事などにしても、何をやるにしても、ものごとになんとなく慣れてくると、すぐ人間はマンネリズム、あきってしまうということが、よくあるものだという考え方が基になっています。

言い換えると、惰性に流されてしまうということです。もっとわかりやすく、はっきりいうとすると、なまけるようになるということです。

これでは駄目だ。熱のこもった、あの初めのころの、スタート、出だしの気持ちにたちかえって、また、がんばり出すことが大事だということです。

この世阿弥という人は、大変芸にきびしい人でしたから、「能は若い時より習い初めて、老いて一生まで徹することが大切だ」とまで言っています。

皆さんにとっても、今は、新しい年の出発の時期ですから、ぜひ覚悟を決めてもらいたいと思います。よし、自分は、今年はこれでいくぞ、と心を固めてもらいたいのです。そして、その覚悟を忘れないで、がんばっていくことを、みんなで誓い合ってほしいと思います。

そして、今年の12月ごろになったときに、皆さんが、今年一年間を振り返るときに、自分は自分なりに頑張れた一年になったなと思えるような年に、ぜひすることができるよう、自分に厳しく、自分で決めた覚悟を持ち続けながら毎日を過ごし、一步一步、前に進める一年間にしてください。

そして、そのときには、頑張った自分を、ぜひほめてあげてください。そのことを期待して、3学期の始業式のあいさつとします。

